

ひかりが、弾けた。

ひかり、ヒカリ、光——

それは、彼らの輝きを記録するために用意された、眩いストロボの嵐。

ひっきりなしに焚かれるカメラのフラッシュに身体を強張らせながらも、その中心——遊木真は言葉紡ぐ。

『こんな栄誉ある賞に選んでいただき、光栄です……!』

優秀なアイドル映画に与えられる国際映画祭【I F F】の授賞式。

不慣れたタキシードに身を包んだ彼が、ステラシアターの壇上で戸惑いながらも取材陣の質問に回答している映像を見て、明星スバルは笑った。

「おお。ウッキィ、すっごくキラキラしてる! よつ、世界的トップスター……☆」

「そ、そんなに大げさに言わないでよ、明星くん。僕はただ、作品を代表してインタビューを受けてただけだからねっ?」

「それがすごいんだよ。いやあ、トップスターは言うことがうねね!」

【I F F】から数日が経ち。

帰国した真と真緒は、『Trickstar』のスバルと北斗、そして『プロデューサー』を交えた五人でE Sのミーティングルームに集まっていた。

すでに報道では部分的に使用されている授賞式のインタビューだが、フルバージョンが動画配信SNSに投稿されるので、映像チェックをする必要があったのだ。

自分の発言で誰かを不快にしていないか、真はいつも慎重だった。

その日は受賞の高揚感に包まれていたから、うっかり失言していたかもしれない。

入念に動画を追って、発言の中におかしな内容がないかと確認する。

『桃源郷偶像拳』が大賞を取った理由、ですか？ ええっと。やっぱり、共演してくれたみんなや、スタッフさんの力があつたからだと思います。僕は演技初心者だから、周りのひとがたくさん指導してくれたり、現場でリラククスできるように気を遣ってくれたんです』

インタビュアーの質問に、真摯に回答する真。

そんな姿に微笑んで、隣に座っていた北斗は優しく語りかける。

「謙遜しすぎだぞ、遊木」

「そうそう。主演なんだし、もつと胸張っていいんだからな」

真緒も北斗に相乗りし、真の肩をポンと叩く。

「周りに恵まれただけだとしても、世界で一番を取った事実には変わりないだろ？ インタビュアーの後も、最後の最後まで主演らしく振る舞ったんだ。もつと堂々としてろって！」

真緒の発言に、現地に行っていないスバルと北斗は目を丸くする。

「ほう。知らない話だな」

「気になる気になる！ ウッキ、インタビュアーの後、何があつたの？」

椅子から身を乗り出し、興味津々にスバルが聞く。真は苦笑しながらも答えた。

「べつに、大したことじゃないんだけどね」

「真は当日の夜を思い出すように、座席に深く腰掛ける。」

「まさか、最後まで驚きの連続だとは思わなかつたよ」

「真はそう言うのと、滔々と語り始める。」

あの日の夜の、出来事を。

* * *

【IFF】会場であるステラシアターから徒歩十分。

NYの中心街・タイムズスクエアに真と真緒は舞い戻っていた。

三月とはいえ、まだ肌寒いNYの夜。二人はタキシードから防寒性の高いウインドブレーカーに着替えて、煌々と輝く繁華街を歩く。

二人が向かっていたのは、同じくESからの選抜メンバーである零が手配した個人経営のレストラン。鮫島三成の仕組んだ事件が解決したこともあり、NYに来たアイドル一行でお店を貸し切って、『I F F』の祝賀会を開くことにしたのだった。

タイムズスクエアの電光掲示板に表示された時刻を見て、真は言った。

「インタビュアー、長くなっちゃったね。みんな、待ちくたびれてないといいけど」

「まあ、朔間先輩たちが会場を出たのも一時間前ぐらいだし——NYの思い出話でもしながら楽しんでくれるんじゃないか？」

「ふふ。今日は本当にいろんなことがあったしね。僕たちも、早く話の輪に加わらなくちゃ」
舗装された街路をスニーカーで踏みながら、二人は足早に進む。

しかし、二人を押し止めるように、遠くから声がした。

「マッキー……？」

夜の街には似つかわしくない、若い男の子の声。

思わず、二人は歩みを止める。

「マッキー、こんなところにいたんだね！ 探したよ！」

人混みから突然現れた少年は、真の身体に飛びついてくる。

「ええっと、君は……？」

思わず抱き留め、顔を見つめる。そこにいたのは、あどけない顔立ちの黒人少年だった。背は真よりも頭ひとつぶん低く、日本でなら小学生の輪の中にもおかしくないほどだ。

真がきょとんとしながらか見つめてみると、少年はムツとしたように言った。

「まさか忘れたとは言わせないよ」

「……………」

「冗談はよしてよ。ぼくだよ、オリバーだよ」